

令和2年度 第2回川崎市教育改革推進会議（摘録）

日 時：令和2年11月18日（水）18：00～19：30

場 所：川崎市教育文化会館3階 第6・7会議室

出席者：高木委員、藤原委員、内田委員、吉田委員、根岸委員、宮越委員、舘委員、佐藤委員、  
永野委員、高井委員、稲葉委員、前島委員

（事務局）小田嶋教育長、石井教育次長、田中教育政策室長、森学校教育部長、  
星野学校教育担当部長、市川総合教育センター所長、  
二瓶教育政策室企画調整担当課長、添野教育政策室政策推進担当課長、  
栃木総合教育センター情報視聴覚センター室長ほか

欠席者：なし

傍聴者：なし

司 会：二瓶教育政策室企画調整担当課長

[配布資料]

資料1：川崎市教育改革推進会議運営要綱

資料2：川崎市教育改革推進会議委員名簿

資料3：学校教育におけるICTの活用について

参考資料1：GIGAスクール構想の実現へ（文部科学省発行資料）

参考資料2：かわさきGIGAスクール構想（川崎市教育委員会）

[次第]

1 開会

2 教育委員会あいさつ（教育長）

3 議題

学校教育におけるICTの活用について

・・・資料3

**議題 学校教育におけるICTの活用について**

**舘委員**：ICT活用の取組に関しては、我々保護者も注意深く見守っているところ。GIGAスクール構想が前倒しになるということで、我々保護者としても期待しているところがある反面、子どもたちがどこまでこの環境について慣れていけるのか、一抹の不安もある。ただ、全体としてこのような取組はどんどん進めてほしいと思う。まだまだコロナウイルスが収束する見通しが立たない中で、このような取組に関しては待ったなしの状況と思う。

まず資料のCMSの導入や、家庭とのコミュニケーションの一環でメール配信システム、これは多分ミマモルメだと思うが、こちらの導入を市のほうで考えているという話は保護者のほうも把握している。こういったCMSやメール配信システムを使うことについては非常に私自身賛成という考えだが、できればCMSも、情報をアップしたという状態を作るのみでは、我々保護者も気づかないため、必ず情報の更新と情報発信というのをペアで

考えていくというのが大事なのではないかと思う。どうしてもホームページというと、情報だけ見に行くという考えになってしまうが、そうするとそもそも情報が更新されたときに気づかない方がほとんどのため、必ず情報の更新と発信をペアでやっていくことで、学校の取組がより保護者側にしっかりと伝わる環境が整ってくると思う。

また、資料にGIGAスクール構想への対応ということで、校内通信ネットワークの整備、校内LANの整備というところがあるが、これは有線LANや無線LAN、両方とも整備の対象になっているかと思うが、やはりICT学習を前提とした場合、有線LANよりも確実に無線LANのほうが優先度が高いと考えられるため、無線LANについては、今の学校に入っているのは非常に電波が弱いシステムになっているため、現実的に使えるレベルのものをしっかり導入し、学校に入れた端末が全然使えないという形にならないよう、しっかりインフラ整備も予算をつけて進めてほしい。

最後に、個人情報が絡むため、非常に保護者の中には神経質になられる方も多い中で、先ほどクラウドを活用した学習の取組というのがあった。もちろんクラウドを使って様々な人とつながるといって自体は私も非常に賛成だが、その中でもやはりクラウドにアップされている個人情報というのがどこまでシェアされるのか、共有される範囲が気になる。例えばAIを活用して、クラウドのデータを分析したりするのも、AIで分析する事業者に対して個人情報をどこまで開示できるかなど、非常に細かな線引きが必要になってくるかと思うので、そういったところは引き続き慎重にルール作りを進めてほしいと思った。

**佐藤委員：** 私がいる小杉小学校は新しい学校で、Wi-Fiが整っており、パソコンが170台ある中で、経験したことをお話ししながら、自分が今課題にしていること等をお話しさせていただければと思う。

今回、コロナによる休校中と、それから今と、アフターコロナを整理して考える必要があると、個人的には思っている。

今回、休業になったときの一番大きな問題は、今までないがしろだった保護者とのやり取り、要するに情報共有の在り方がガラッと変わったというところが、まず一つ、大きな課題だったと思う。具体的に言うと、連絡帳を使ったワンウェイの連絡方法や、ホームページの情報もタイムリーに更新されないということで、非常にばたばたしたという印象がある。そこをやはりどのようにしていくのかということに、まずエネルギーを費やした。小杉小学校では緊急でLINEを使った双方向のメールを、とにかく危ないと思い、緊急で同意書を取り対応した。そのときに一番感じたのは、教員同士の情報共有が変わったということ。民間の方からどのように情報共有されているのか聞いたが、すでに Slack を導入するなど、人が対面しない形の会議で、情報共有しているという話を伺った。今はもうそれしかできないなということで、今回は教員の情報共有の仕方を学んだというところが一つ、自分としては財産になったと思う。

休校になる、ならないという話から、今はもう子どもたちが登校しているため、それを持続するにはどうしたらいいかといったときに、GIGAが導入される。今後、我々が考えねばならないのは、このツールをどのように使うかということ。ミライシードなどを少し先行して使用してみると、子どもたちは慣れるのが早かった。すごく早くできるように

なるということを経験した。実践としてはできるが、その実践がどこにつながるのかというところが課題。一つ一つの授業では使えるが、どのような子どもたちを育てていくのかというところがやはり疑心暗鬼で、このプランを見中でもゴールがどこなのかと感じた。

キャリア在り方生き方ということだが、小杉小学校では生活総合を全面的に出して、地域の人と子どもたちがつながるといことがふさがれたときに、GIGAが入った。要するに学校教育目標だとか資質能力というところがガラガラと崩れている中でGIGAが入っている。そこでキャリアに行くために、どういうスタンスで教育していくのかというところで、これから議論を皆さんとしていきたいと思う。本当に今は悩みどころで考えているところ。システムとしては本当にすばらしいと思っており、教員がしっかり、勉強しなければいけないと思う。

**藤原委員：**コミュニケーションのツールとしては、リアルができないときにもものすごい威力を発揮したと思うが、子どもとの間というのもICTを使って、休業中もコミュニケーションをとったのか。

**佐藤委員：**小学校では保護者の協力ができないので、Zoomも授業は無理だと思った。そのときに、委員会の方々から、つながりということをZoomでと提案があった。ホームルームだとか保護者と懇談会をやってみて、学校の情報をお伝えするようなことを一生懸命して、学校説明会も動画で説明したら、保護者はもうそれでいいよと言ってくれた。お父さんやお母さんと子どもと一緒に見られ、新しい形ができ、どんどん変わってきていると思った。ただ、どこに向かっているか、自分が分からないため、それについてやはり今とアフターコロナで、どのように学校全体をデザインしていくかというところを今すごく日本中が考えているかと思うが、一個人の学校だけがそうしていくものではないと思うので、そこは皆さんと考えていきたいと思う。

**藤原委員：**やはり小学校の場合、ICTを活用した教育というのは保護者の協力というのを必要とする部分というのがある。そのため、それ自体、保護者の協力をどのように得て、また得られない保護者はどうするのかなどの問題もある。

**宮越委員：**私は地域協議会から出席している。子ども会議、寺子屋にも関わっている。私たち地域側から見たとき、今回のコロナは本当に、子どもや学校との距離感というのが切断されてしまったと感じた。最初の2か月ぐらいは、もうどうにもならない中だった。いろいろ新聞などを私たちが見ているとオンラインでつながりはじめるような動きがみられた。これまで毎月1、2回程度リアルでしていたいろいろな活動に変わり、オンライン上で活動することを子どもたちに発信したところ多いときは20人ぐら参加した。2か月ぐらい全然会わなかったが、画面越しに会えた瞬間は物すごく感動した。オンラインはすごいと私も思った。オンライン飲み会やオンラインパーティーをやろうよとか、いろいろ子どもたちなりにすごくアグレッシブに反応してくれた。その後、何回か続けていくうちに、だんだん鮮度が落ちていって、私たちがツールになれていないということもあり、そうこう

しているうちにリアルで会えるようになった。やはりリアルの良さを感じた。

一つ感じたことは、オンラインに入ってくることができる子どもと、できない子どもの差がものすごく気になった。そういう意味では早く、どの家庭でもオンラインで交信できるようにしてもらいたいという気持ちがあったため、今回、GIGAで前向きに、しかも相当前倒しに進みよと思った。そこら辺の格差というのを越えていく意味では、すごく良い、早い対応だなと思いつつも、私はもう既に相当の年で昔の人間なので、半分ぐらいしか理解できない。ある意味、こういう新しいものになかなかなじめない。私としては、あまり細かいことをコメントできないが、AIが進み、得られるものはたくさんあると思うが、既に我々はSNSの問題などを経験している。その中で様々な問題がある。リアルであることによって得られる教育効果の関係や子どもたちの育つ環境というのは、すごく大事だと思う。両方しっかり見据えた戦略を立てていかないといけないと思う。

**永野委員：**宮越さんのお話、その前の佐藤校長先生のお話を聞いて感じたが、中学校では先だって、ミライシードのオクリンクを使い道徳の授業を実施する取組を実験的に行っている。オクリンクを使うと、情報共有がとても容易にでき、どの子が、どのような意見を持っているか、それを指導者の側も瞬時に把握することができ、友達間の、子ども同士間においても、友達の意見が今どうであるか、またそれがどう変容してきたかということも一元的に情報共有できるような形になっている。実際に授業をしてみて、良さを感じた反面、リアルとツールとのハイブリッドが大事だと感じた。タブレットを使用した授業では、子どもたちがみんな画面を向いて、意見を交換する風景を見た。これまでの道徳の授業では、人間と人間が向かい合い、友達同士で意見を言い合うというところにも意味を感じていたが、全員パソコンの画面を見ているというような状態が起きた。授業を行うほうとしては、ツールを使用した授業を一生懸命組み立てたが、その先にある、「何をこの授業を通して子どもたちに身につけさせるのか」ということを見落とし、忘れているのではないかと感じた。そのため、今回1人1台配られることで、大変いろいろなことが便利にできるようになることは私たちも分かり、教員側は何とかしてその便利な機器を有効に使用したいと思うが、一方で協働的な学びについて見落とし、忘れてしまうといけないのではないかと意味での、両輪ということが大切だということを思った。同時に、佐藤先生から御指摘のあった、どんな子どもを育てるかということをしっかり教員が念頭に置いて、このツールをどのように使うか、この道具をどう活用するかということを常に考える必要があると感じた。

**前島委員：**私は教職員組合なので、学校現場のほうから声が上がってきたところでお話しさせていただければと思う。今回のコロナで先ほど佐藤校長先生もおっしゃっていた、ホームページの更新等もあったが、全市の学校の状況を見ると、毎日のように更新している学校と、休業になりましたと言ってから何の更新もないところ、オンラインで学習課題を出しているところと、本当に様々だった。それは何故かと考えたときに、やはり得意な先生がいる学校はよくやっていたのかなと思う。どうしてもパソコンを使うことが苦手な先生も多くいるので、そういうところでの差があったかなと思う。学校の中でもそのような形で

差があり、ホームページも今度はもう少し簡単に更新できるものになるというように伺っているが、我々としては助けていただける支援員を本当にたくさん配置し、ホームページの更新や、あとは学校の中のパソコンの設定など、不具合があったときにどうすればいいとか、そういうことにすぐに対応していただける人がいるといいという声が上がっている。本当に便利なものなので、うまく私たちもしっかり研修して、使いこなして、子どもたちとうまく使っていきながら、一つのツールとして使っていけたらいいと考えているが、やはりそのためには助けていただく方が必要なのではないかという話がある。

**藤原委員：**校長先生方のお話と同じく大事な論点で、得意な人だけがやっている限り、その人の実践で終わってしまい、どうしても格差が出てしまう。ホームページの作成というのが本来的に教員業務かどうかということは今後検討していかなければならない論点ではあるが、得意な人だけができてしまうと、どうしても格差が生まれてしまう。どうやって裾野を広げていくのか。もちろんそういうテクニカルなサポートというのを得ながら、川崎市全体として、みんながICTとの親和性のような、つまり苦手感を克服していくような取組というものが必要だろうと思う。そのためにはどうすればいいだろうかというのは、恐らく日本全国の学校が悩んでおり、得意な人はできるよねとなっているが、いろいろな持ち味を持った教職員みんなを取り組んでいくためにはどうすればいいか、この辺りもまたいろいろ支援が必要だし、その辺りで言うと、やはり宮越さんのおっしゃった、つながったら楽しかったという感覚は結構大事だと思いながら、聞いていた。やはりハードルが高いと人間は誰でもやりたくないの、スモールステップとよく言われる。そういう中で無理なく少しずつ変革していくということが、子どものためになったというより、楽しかったとか、そういう経験が大事なのかなと思いつつ聞いていた。校長先生の御意見と重なるが、とても大事なのは裾野を広げることであり、そのためにどうするかということが大事な論点だろうと思う。

**高木委員：**5点ぐらいあるが、今までかなり委員の皆様から出ている発言もある。私はICTというのは手段だと思っており、あくまでツールであり、これを目的にはできないだろうと思う。ただし、使うためには目的で練習や何かすることも必要だが。例えば、今は筆で書かれている方は一人もいないと思う。要するに時代が変われば当然変わるわけで、ICTは便利だから使えばいいのであり、そここのところを抜きに学校教育にどうしても入れなければならないというわけではない。いつか、コロナウイルスがはやったときに、ある教育評論家なんかで、「オンライン教育というのは絶対だ」みたいな言い方をしている方もいた。だから、それが目的になるのではなく、やはり使うことの必然性があるものに関して、我々は今後探りながら、一気に行くのではなく、考えていく必要があるのではないかというふうに思う。先ほど佐藤先生がおっしゃった、何のために使うかというのが抜けると非常に形骸化していくし、また使われなくなるだろうと思う。

ある市では議会が、パソコンを入れた以上、どのぐらい稼働率があるかを調べて、市議会へ報告するようになっている。教頭先生はまたこれで大変になるが、どのぐらい使われているかを調べるという市も結構ある。川崎市がどうかは知らないが、そういう調べ方

はエビデンスではないと思う。

事務局に一つだけ、資料の本市における取組の中で、下の即時的、形成的評価のところは、実はこの形成的評価というのはブルームという人の評価論の考え方で、川崎市はそれを取扱うのかどうか。文部科学省では「形成的な」と、わざと入れている。子どもを形成的な段階を踏みながら評価していく。言葉の使い方を誤ると、ある一部の評価論になるので、その辺りはどういうふうに使われているか。その辺は、すぐではなくて結構なので、少し御検討いただかないと、誤った使い方になるので、注意が必要。

それから、これは私の実感だが、5月、6月はいろいろなところの研修がオンラインになった。私は視力が落ちた。子どもの視力をどうするか。これが全てではないが、いろいろな研修、例えば川崎市もセンターでの研修をオンラインでやっていくとなっている。地方の方は、講師の交通費がかからないためオンラインにしたほうが研修をできるというが、やはり対面のほうが良いと思う。今もうなずいてくださる方がいるが、私はその方に励まされて話をしている。対面式だとそういうことができるが、パワーポイントで150分やったことがあるが、とても負担が大き過ぎた。そのため、子どもたちの健康面はどうするかということ、それが一つ問題としてある。

それからあと、導入のときはいいが、機器の更新をどうしていくか。どんどん物がよくなっていくときに機器の更新の予算をどうするか。元々ICTの導入は、文部科学省のほうから、地方交付税で、かなり前から予算が入っているはず。そのため本当は、今回いきなりGIGAになったから出た予算ではなく、本年度ではなく、実は今年1月の補正予算、PISA調査の中でCBTができなかったため、その補正予算で3年送りに入れていく予算であったのを、コロナウイルスになったため一気に、導入を進める事情があるため、今後は予算を相当考えていかないと、修理したり壊れたり、当然子どもたちは落としたりするため、そういった予算も入れることを考えていくことが非常に必要だと思う。

それから、先ほど前島委員が言われたように、教員の仕事の内容を精査しないといけない。今、学校が放課後になると先生方は自分のクラスへ行って消毒している。毎日消毒している。その時間が結局あるわけだ。いろいろなことを教職員はしなければならないため、端末が入ると、またこれでいろいろな教職員がこれに関わっていかなければならない時間が必要。できれば、やはり担当者がいて、教材の整備であるとか、そういったものをしていかないと、使われなくなっていくだろうというふうに思う。本当は、教育界で一番必要なのは機器ではなくて人だ。そのため、そこをきちんとしないと、GIGAスクールをすることが目的ではないということを、やはり皆さんできちんと考えておかないと、ボタンを掛け違い、結局は機器が入ったけど使われないという状態になってしまう。昔の、LL教室とか、そういったものの二の舞になってしまうので、その辺は注意したいと思う。

**藤原委員：**ツールであることを認識することはものすごく大事だ。たかがツール、されどツール。

ツールであることは確かだ、そこをどのようにつき合うかが大事なことだというふうに思う。

**高井委員：**私は高校なので、今回のGIGAスクールで配備される端末の面では対象外ではある

が、市立高校が5校ある中で、本校も含めてそのうちの二つの高校では、受益者負担という形で費用を自己負担してもらっており、いわゆるBYODと言われる形でタブレットを使用している。その学校が今回コロナ禍の中で、やはり他の学校よりはZoomとか、グーグルのミートを使いオンライン授業ができた。やはりこれは高等学校の特徴だが、地域に子どもがいるわけではなく、通学してくる、遠方から出てくるため通学時間がある子どもたちのため、いろいろな課題がある。例えばZoomでオンライン授業が展開できるまでの間に、今回のことと言えば、緊急事態宣言が出た後、一体どのぐらいの期間休校になるのかというのは当初どこの学校も見えていなかったため、とりあえず学習を保障しようということで課題を郵送した。しかし、同じようなことを考えている学校が全国にあったということで、ゆうパックのパッケージがなくなるということが起きてきた。そんなところも意外だった。

それから、臨時休業になり、一体どこから手をつけていいのかというのが、正直見えなところだった。企業の知り合いの方に聞いたところ、学校の職員としては目からうろこという感じだったが、そもそも基本的に何年も前からテレワークを推奨しており、今回はそれを本格的に実施するという事なので、それほど困らないということ言われて驚いた。そもそも、その企業では机が人数分置いていないと言っていた。一定程度は在宅しており、8割程度のデスクしかないということで、そのデスクをシェアして勤務しているということ聞き、驚くのと併せて、急いでオンラインに取り掛からなければいけないということで、Zoomの授業を展開した。

ただ、先ほど、やはり対面という話があったが、長い期間、離れていたもので、オンラインで授業を開始し、まずはホームルームから、子どもたちの顔を見るところからというふうな活動が始まった。子どもたちの顔を見られたということで、やはり涙ぐむような先生もおり、本当に大きく安心したところが実態としてあったと思う。

そして、ツールという点では、校内で緊急タスクフォースを作り、学習計画の全体像としてはベテランたちが、ツールのノウハウについては若いスタッフが中心になってやってくれるようお願いし、少し切り分けをしたことで、結果的にはとてもうまくいったと思う。

それに併せて、せっかくそういうことが導入できたため、校内会議もオンラインで行うなど、それに併せて、資料もペーパーレスでできるだろうということで、導入してみたら意外と、印刷する作業量を減らすこともできたので、効果としてはよかったと思う。

ただ、私もオンライン授業に出てみて、先ほど視力が落ちたというお話があったが、やはり疲れると感じたことがあった。というのは、それまでは意識していなかったが、会議の最中も人間はやはり一定程度は動く。座り直してみたりとかがあるが、ずっとオンラインでパソコンの画面からずれないように意識していると、やはり肩に力が入っていたりするため、会議が終わると随分な疲労感がある。子どもたちも授業をこれですっと受けているのは少し疲れるのではないかと思った。

ただ、大きな課題としては、これは海外の方から指摘され、納得したことだが、日本は国内的に見てWi-Fiの整備が立ち遅れているということ言っていた。そのため、このオンライン授業を展開するために私たちの学校で課題となったのは、通信料をどのように、御家庭に御理解いただくかということと、もし今後このようなコロナ禍の第2、第3

波となったときに、Wi-Fi環境の整備は急務だという課題があった。

**藤原委員：**実際の経験談でということで、興味深く聞かせていただいた。確かにZoomの授業は、これまでと同じスタイルで行うと、多分疲れると思う。新しいスタイルというのも必要なのではないかと思った。

**吉田委員：**最初に報告を見て感じたことは、Society 5.0と盛んに言われている時代がとうとう教育の現場に入ってきたという印象をすごく強く持った。とはいうものの、先ほどの皆様のいろいろな発表をお伺いしていて、学校現場で、教育の現場で様々な、いわゆる課題が実際にはあると知った。

私も実は5月に新人職員研修をZoomで行った。先生方がお感じになっているような疲れを感じた。私は、企業からの要請があり、5時間行ったが、本当に無理だと感じた。もう2時間でへばり、できても最大3時間だと思った。そういう意味では、いろいろな御苦労が教育の現場ではおありなのかなと、つくづく思った。健康の問題もあるなと感じた。

気になっていたのは、お話を伺っていて、そういう意味では、先生方のお話の中で、例えばSEを、いろいろなIT環境の、あるいはほんの些細なパソコンの不具合、それからやはり慣れ、不慣れとか、得意、不得意はあると思うので、そういうシステムを、巡回するようなSEがいるような、あるいは本当は理想的には各校に1人ずついればいいと思うが、予算の関係とかで難しいと思うので、そういうシステムをお考えになるといいと思う。

ある法人で、そのような提案をしたところ、いろいろな施設が5か所あったが、1人、そういう巡回のSEを雇い、常に定期的に回ることにより、様々な不具合が解消されたという事実があるので、今後お考えいただけるといいのかもしれない。

あと最後に、もう一つ申し上げると、私はやはり、多くの先生方もおっしゃるように、リアル、対面というのは本当に、何らかの形で定期的に会ってほしい。触れ合うということはすごく大事だと思っている。資料にもあるが、つながるといのは、確かにオンラインは、全く今までなかったところで顔が見られたと先生が言っていたが、うれしい先生方も多いと思うが、やはり本当につながる、ここにキーワードでつながるとあるが、つながりにはリアルの部分がすごく大事だと思っているので、そういう機会が、今後どういうふうになっていくか分からないが、何らかの工夫をし、安全衛生についてももちろん準備をしながら、そういう環境を維持してほしいとそのように感じた。

**根岸委員：**私には小5と中1の子どもがおり、緊急事態宣言が発令している中、うちの子どもたちの様子をお伝えたい。うちの子たちはスマホを持たせておらず、ほかの子どもたちとつながっていない時間がすごく、本当に長くあった。学校は定期的にLINEのやり取りがあり、先生に連絡してということもあった。

うちの子は塾へ行っており、そのときも通塾はなくなったが、塾でオンライン授業を受けることがあった。やり始めた頃は、一斉にみんながその画面を見るので、フリーズしてしまい、動かない先生を10分ぐらい、ずっと見ていることがあった。うちのIT環境と

いうのもあると思うが、そんな中で、勉強も塾通いもなく、すごくイライラし、私もイライラしてということが結構繰り返した。今回、いろいろお話がありましたが、通信の環境とかICTとか、そういったものをしっかり整備しないと、うまく子どもたちも学習できないと感じた。

親としての一番の不安は、親は自粛期間中も仕事をしていたため、子どもを家に残して外出するとなったときに、家のパソコンなりタブレットなりを使って学習するが、タブレットを壊されてしまうのではないかと不安があった。うまく使えるのかもすごく不安があり、結局自分では教えられなかったが、そういうところもあったため、恐らく多分学校で、しっかり教えていただけたと思うため、それであれば多分、子どもも使いこなせるだろうと思っているので、期待したい。

うちの子たちはもう大きいため、すぐに使いこなせるが、低学年の1年生や、その辺のお子さん方が本当に使いこなせるのかと思う。タブレットであれば、スマホでも同じように使っているのだから分かりやすいかなと思うが、キーボードというツールになると、高学年でやっとという感じのため、そこら辺が、低学年のお子さんでも使えるようにというのは課題があると思う。

**内田委員：**私もまさに今年度はICTの導入のところ、大学でオンライン授業を実施していくところで、毎日毎日その準備に追われる日々を今も続けているところ。いろいろやっている中で、いろいろ感じる場所があり、今、委員の方々の話を伺っていて、一つ一つ、同じ感覚を持っている。例えば、根岸委員の話にもあったが、学生に大学が1人1台のタブレットを配付するわけにもいかないため、完全に家庭環境によっている。それで、スマホでしか授業を受けられないという学生も、必ず授業をやるに当たってはアンケートを取っているが、やはり1割弱ぐらいいるという状況だった。そういう学生もいるということ念頭に授業をしなければならぬ。なかなか埋まらない格差ということを意識しながらやっていかないといけないというのは、1人1台のタブレットという環境が整うまでの間に何としても必要になってくる配慮であるということを実感しながら伺った。家庭の環境も、LAN環境がやはり整っていないと、Zoomでもフリーズしてしまい授業に出てこないということもある。

あと、自分の部屋がある学生はいいが、背景にいろいろなものが映り込んでしまうため、カメラをオンにすることに抵抗があるという学生もいる。自分の部屋であっても、いろいろな物を映し込みたくないという学生もいて、そういうところへの配慮も必要だということ一つ一つ、私自身が経験しながらやっているところ。

格差ということへの配慮というのが一つ、大事だと思っている。もう一つ、お伝えしたいと思っていたところは、学びを充実させるためのツールということはもちろんだが、学びを支える生活環境、家庭環境を整えるためにも活用できるといいと思っている。保護者とのコミュニケーションがより取れるようになるというお話は、本当にそのとおりだなと思って伺っていた。例えば何か問題がある、相談があるという親御さんについては時間を取っていたけれども、そこまでではないとか、特に相談するほど深刻な問題ではないと思って今まで見過ごされていた親御さんの話も簡単にキャッチできるようになると、

問題が深刻化する前にキャッチでき、そこに対して先生方とコミュニケーションが取れるようになっていくところに使えるようになる、とても子どものためにもよい影響があるのではないかと思った。また、それが子ども自身の不安感を先生方がキャッチしやすくなる場所にもつながっていくといいのではないか。

今、大学でオンラインをやってきて、学生から言われるオンラインのよさということで、例えばZ o o mのチャットボックスを使って質問しやすいということを言われた。授業で対面で手を挙げて質問するのはしにくい、でも今、ここで分からなかったことについて質問するというのがZ o o mはしやすい、オンラインのほうがしやすいということを学生から言われたことがある。

やはり子ども自身も、手を挙げにくいというのはあるのではないかと思うし、例えば先生を呼び止めて何か相談するというほどではないとか、それに対して少し抵抗があるとか、そういう子どもたちが、何か自分が困ったこととか、聞いてほしいこととか、ちょっと言いやすくなるような、そのために使えるといいのではないかというふうに、そんなことが1人1台のタブレットで実現するのであれば、学びを充実するためのツールというところはもちろんだが、学びを支える意味で、いろいろな困り事をキャッチし、そういうところに手当を出しやすくなるような、そういうためのツールとしても使えるといいと思って伺っていた。

**稲葉委員：**本校は臨時休業中の5月に、Z o o mを使った取組を行った。少人数である本校のタブレットを生かして行った経験があるが、やはり印象的だったのは、子どもたちがうれしそうな表情を、最初に担任の先生とつながったときに見せていた、それを見た先生たちがすごくうれしそうだったというのが、私の率直な5月の感想だった。

これからの取組については、障害のある子どもたちにとって様々な可能性が広がることもあるのではないかと私は想像する一方、そういう子どもたちにとっての難しさというのもたくさん出てくるのではないかと思う。入院児童・生徒などの教育には、いろいろな可能性が広がるなという期待感も持っている。

教育委員会に配慮いただき、小・中学校とは違う端末が特別支援学校には入ることになったが、多分、入ってからいろいろな課題とか、これは不自由だ、何でこうならないのか、そういうことがたくさん出てくるのではないかと思う。具体的には、きっといろいろな要望とかお願いとかしたくなるのではないかと思う。例えば本校だと、音声文字変換のアプリが本校に導入できなかつたら全然使えないと思っているが、来年以降のことについてもできるだけ柔軟に、相談に乗っていただけたらと思う。きっと来年以降、これはどうしたらいいか、こうしてほしい、というようなことがたくさん出てくるのではないかと思っている。

**藤原委員：**それでは時間が来たので、たくさんの経験が共有できたことは有意義だったと思う。聞きながら思ったのは、やはりこれがツールであるということは確かだと思って聞いていた。いろいろなICTのシンポジウムなどではこのような言葉がある。ペタゴジー・ファースト、テクノロジー・セカンド。これはどういうことかという、教育実践が最初で

あって、テクノロジーは後だよという意味。テクノロジーを入れることがゴールではないという、そういう意味だ。そのため、やはり良い教育をするために、あるいは子どもを幸せにするために、学校というのは確かにコロナの中で今回分かったのは、確かに教育機関だが、教育以外の面でも子どもの幸せにいっぱい関わっていたということが分かった時間だったと思う。そういう子どもの幸せのために、このツールというのはあるのだと。だから、どこの国でも聞くのが、やはり顔が見えた、オンラインで、それで声が聞けたというのがモチベーションアップにつながっている。臨時休校中というのはやはり子どもの学びへのモチベーションの維持というのが物すごく難しい。そういったときに、そんな効果が報告されたりしている。大事なことは、そういうツールだということで、皆さんの中でも御意見が多かったのではないかと思う。

二つ目が、サポートシステムの重要性というのも意見があったと思う。サポートシステムというのを踏まえながら、無理せず、無理するという、そういうところが大事だと思う。無理しないで、少し無理して、少し背伸びしてみるという形で、テクノロジーのよさというのを楽しんでみるというような感覚というのが大事なように思う。今は子どもも保護者も教師も、そういう試行錯誤をしている段階だということ、トラブルもありながら、そういう経験をしているというように思う。みんなが育つようなことがあるといいと思いつつ、聞いていた。

テクノロジーを使ったところで下手な教師がうまくなるわけではないとよく言われる。うまい教師がテクノロジーを使うことでさらによくなると言われている。当然、授業デザインがあり、ICTを使うことで、むしろ若い人よりもベテランのほうが、実はICTを使ったら、さらに良い教育ができる可能性を持っていると思う。

最後に、やはりインクルーシブな教育をつくっていく、公正な教育をつくっていく上でICTをどう使うのかという発想が大事なように思う。最後におっしゃっていただいた特別支援教育とかの場合においては、ICTというのは能力を拡張するツールである。そのため、本当の学びへ、同じスタートラインに立って、みんなが学べるようなツールとして使えるのではないか。そういう公正というようなことも大事にしなが、これを使っていくというのが大事だと思いつつお聞きしていた。

以下、事務連絡

〈閉会〉